

連続／不連続性—— Ian McEwan の *The Child in Time* における変容する時間

岡 典 子

序

1975年に出版された最初の短編集 *First Love, Last Rites* 以来、初期の作品では、殺人や異常心理といった暴力的で衝撃的な内容が続き、イアン・マキューアンの作風は Ian Macabre、つまり「おぞましいイアン」と評されてきた。しかし、長編小説3作目となる1987年の *The Child in Time* では、大きくその作風が変化し、危機を迎えた夫婦の愛の再生、子供への愛を中心とした非暴力的な内容の小説となっている。さらに超自然的な体験や時間というテーマを取り上げ、量子論を駆使してプロットに組み込むことで作品にエンタテインメント性を与えることにも成功している。そして最大の変化は、新しい命が誕生するという希望に満ちたエンディングを採用していることである。マキューアンは、1983年のインタビューで、当時の妻ペニーと彼女の前夫との間の子供と一緒に暮らしていたことから、“Butterfly” という少女への性的暴行を描いた初期の短編について、「子どもと関わりのない人間が書いたもので、今の自分には書けないだろう」(Haffenden 172) と語っている。さらにその後、1985年にマキューアンの最初の子供が生まれ、この出来事が作風の変化の一因となっていることについて次のように話している。

Having children has been a major experience in my life in the last few years. It's extended me emotionally, personally, in ways that could never be guessed at. It's inevitable that that change would be reflected in my writing. [...] In a sense, I feel it is my first novel. (Smith 68 – 69)

ここで、*The Child in Time* のことを “[I]t is my first novel.” と表現していることから、まさに別の人間が書いたともいべき作品であり、初期からクロノロジカルにマキューアン作品を読むとすれば、この変化を作家としての転換点と見ることができる。また、90年代後半以降の小説 *Enduring Love* や *Atonement* における「愛の本質の探究」というテーマと「建築物のような緻密な小説構造」の萌芽がこの作品の随所に見られることも転換点と呼ぶ理由のひとつになる。この小説のテーマに即して表現するなら、不連続な突然の変化が出現した作品と言えるだろう。

この小説は、主人公である児童文学作家スティーブンの3歳になる娘ケイトが、買い物に行ったスーパーで忽然と姿を消すという事件から始まる。その日を境に妻ジュリーとの関係に亀裂が生じ、別居生活を送ることになるが、それぞれが孤独に娘の喪失と向き合い、最後には夫婦の絆、そして家族の再生を果すという物語である。三人称で書かれたこの小説は、主にスティーブンの回想の形で出来事が語られ、小説の構造から、プロットや人物造型に至るまで、徹底して読者に「時間」を意識させる構成となっている。例えば、スティーブンは、別居中の妻の家を訪ねる途中の森のなかで、時間を超越した不思議な体験をする。突然、過去のある一日に入り込み、結婚前の両親の姿を目撃するのであるが、このことがスティーブンの遭遇するのちの出来事に大きく影響を与える。この体験について、スティーブンの友人である女性物理学者セルマが次のように解釈を試みている。時間というのは、まだ議論の分かれているテーマであるが、“The twin pillars are relativity and quantum theories. One describes a causal and continuous world, the other a non-causal, discontinuous world.” (118) であるとスティーブンに説明する。アインシュタインは「神はサイコロを振らない」という有名な言葉を残しているが、これは「現在ないし未来の出来事／事象はすべて、過去の原因の結果として説明できるという信念」(Malin 18) に基づいている。*The Child in Time* は、過去・現在・未来の因果律が破壊され、再構成されているかのような印象を受ける作品である。しかし、このクロノロジカルな「連続した世界」とは異なる

る「不連続な世界」とはどのようなものなのだろうか。本稿では、「非因果的で不連続な世界」というセルマの言葉に着目し、それが作品のなかでどのように表現されているのかを考察したい。

量子論は東洋思想との類似性を指摘されるなど、その哲学的な要素も注目されているが、ここではセルマの語る言葉が、どのように小説の形式や語りの技法、さらに細部の文章に反映しているかを考えてみる。その際、量子論は事象の可能性を数学的に探求する学問であるため、その本質的な考えとの類似性についてのみ言及することとする。また、タイトルの *The Child in Time* に込められた意味について、この考察を通して明らかにしていきたい。

I 不連続な時間

現代物理学において、二大理論と言われているものは、作中人物のセルマが語る通り、アインシュタインの相対性理論とニールス・ボーアらが確立した量子論である。日常の世界については、相対性理論の基礎となるニュートンなどの古典力学によって、物体の移動距離や所要時間などの物理量を、連続的に変化する数量として、数学的に記述する方法が解明されてきた。例えば、1 cm の線分があって、半分にすると0.5 cm さらに半分にすると0.25 cm と永遠に半分にし続けることができる数値で表される世界、つまり距離を表す数値には「連続性」がある。私たちの日常、つまりマクロの世界は「連続的」であると言える。一方、量子論が扱う光や電子といったミクロの世界においては、光は粒子であり、1個、2個と整数で数えることから、「不連続」な性質を持っている。しかも、このミクロの世界では、まったく因果関係が説明できない現象が起こるのである。私たちの日常のエネルギーや時間は、連続的なものであるが、原子や電子の世界では、その運動は不連続な性質を持っているということが量子論に言及する上での前提となる。さらに私たちが漠然と持っている過去・現在・未来という連続的な時間の感覚は、人間の意識が作り上げているもので、そこに当然のように因果関係を見出しているが、量子の世界では、このような時間の感覚は無効になる。では、量子論が

モチーフになっている *The Child in Time* において、時間はどのように扱われているのだろうか。

この小説における因果関係を考えるために、スティーブンの不思議な時間の体験を詳細に見てみたい。スティーブンは、日常的な時間の枠組みを逸脱して、結婚前の両親に遭遇する。母は妊娠しており、まさに産むかどうかの話し合いがなされようとしている場に現れてしまうのである。この「時間の歪み」が起こる場面は、3章という早い段階で語られている。彼は、田舎に引きこもっている別居中の妻に会いに行く途中で、田園地帯を歩いており、「幾何学的な」針葉樹林を通り抜けると、果てしなく続く小麦畑があらわれる。この風景の変化は、「時間の歪み」の予兆として効果的に使われている。

On both side there were planted lines of conifers with their flashing parallax as one row ceded to the next, a pleasing effect which conveyed a false sense of speed. It was a geometrical forest [...]. The pine forest gave way abruptly to an unbounded prairie of wheat. [...] He was marching across a void. All sense of progress, and therefore all sense of time, disappeared. (51-52)

ここで「彼は何もない空間を歩いて進んでいた。前に進んでいるという感覚が消え、そしてその結果、時間の感覚がなくなった」（拙訳）と語られているように、風景の変化が人間の時間の感覚に作用し、次の場面で起こる出来事の前兆となっている。この一節に続いて、歩きながらスティーブンは回想する形で、別居に至るまでの経緯と、今から会いにゆく妻ジュリーが遂げているであろう変化への恐れが挿入されている。そして再び小麦畑に意識が戻り、さらに進むと、ある場所に辿り着く。

He knew this spot, knew it intimately, as if over a long period of time. [...] One visit in the remote past would not account for this sense, almost a kind of ache, of familiarity, of coming to a place that knew him too, and seemed, [...] to expect him. What came to him was a particular day, [...]. Here it was, just as it should be, the heavy, greenish air of a wet day in early summer, [...]. It was on just such a day, he knew, that this place gained its impor-

tance. [...] He had never been here before, not as a child, not as an adult.
(56)

スティーブンは、「一度も訪れたことのない場所」でありながら、親しみを感じ、さらに記憶がないにも関わらず、過去の「ある特定の日」がそこにあることを確信する。これは単なる既視感ではなく、実際の体験に基づいていることが小説後半の母との会話でわかってくる。記憶がないのに、角を曲がる前に、左に電話ボックスがあり、その向かいにパブがあること、その建物の位置までも予想することができ、実際に行動に移すと、すべてが符合しているのである。そして風景は針葉樹林からカシやブナの巨木に変化していることにスティーブンは気がつく。さらに、パブの窓から中を覗き込む直前の“*He [Stephen] was an intruder. This place both concerned and excluded him, there was a delicate negotiation whose outcome he might affect adversely.*” (58) という語りから、そこでは「微妙な話し合い」つまり子供を産むべきかどうかの話し合いが行われ、自分が姿を見せれば「その結果に悪く影響するかもしれない」とスティーブンが感じていることがわかるが、ここでもこれから起こる出来事を先見的に知っている点が強調されている。続く場面では、パブの中には二人の男女がいて、スティーブンが、“*[T]hey might have seen a phantom [...] It was a face taut with expectation, as though a spirit, suspended between existence and nothingness, attended a decision, a beckoning or a dismissal.*” (59) と自分のことを“*a phantom*”や“*a spirit*”と表現していることから、肉体的な実体としての感覚を失い、この世に生まれることになるかどうかの瀬戸際にいる胎内の自分と同化していることがわかる。以上のように、スティーブンの体験する時間は、単に過去の両親に遭遇するだけではなく、出来事を先取りする既知の感覚を伴っている。これは、現在のスティーブンの心的状況に影響された胎児への退行であり、胎内での記憶が表現されている。その直後、スティーブンは突然女性のほうと目が合い、彼女は窓の外の本立を見ているだけで「スティーブンが見えてない」が、まぎれ

もなく自分の母であることをスティーブンは確信する。しかし、「自分の息子が見えていない」ことに落胆し、次のような感覚に襲われる。

The air he moved through was dark and wet, he was light, made of nothing. [...] He fell back down, dropped helplessly through a void, was swept dumbly through invisible curves and rose above the trees, saw the horizon below him even as he was hurled through sinuous tunnels of undergrowth, dank, muscular sluices. [...] [H]is fingers were scaly flippers, gills beat time, urgent, hopeless strokes through the salty ocean [...]. [H]e had nowhere to go, no moment which could embody him, he was not expected, no destination or time could be named; [...]. And this thought unwrapped a sadness which was not his own. It was centuries, millennia old. [...] Nothing was his own, [...] nothing was nothing's own. (60 下線は筆者による)

悲しみと絶望感をあらわすような否定語が続くこの一節で、スティーブンは、子宮と思われる場所を通り抜け、体が次第に軽くなり、胎児から、さらに無へと退化し、「僕には行く場所がない。僕に肉体を与えてくれるはずの瞬間がない。[...] 行き先も時間も言うことができない」と語っている。そしてこのスティーブンを焦点人物とした語りは「この思いが彼自身のものではない悲しみを解き放った。それは何百年、何千年の昔からの悲しみだった。[...] 無に自分のものはないのだ」と絶望感で締めくくられる。「僕に肉体を与えてくれるはずの瞬間がない」とは、起源の喪失を意味しており、無は無のまま永遠に反復をする一種の狂気の状態である。ケイトを失い、妻をも失うかもしれないという悲しみや喪失感が極限に達し、スティーブンの強迫観念が、本来思い出せるはずもない胎児である自分、つまり「自己の起源」を見せてしまったのである。さらにこの不思議な時間の体験は、7章においてスティーブンの母クレアが、結婚前のクレアの視点からこのパブでの出来事を語ることで、全貌が明らかになる。つまり、単なる白昼夢ではなく、事実として提示されていることがこの箇所である。クレアは、戦争から一時帰国していた恋人、つまりスティーブンの父に、子供ができたことを話す、あ

まり嬉しそうではない様子に腹を立てて、パブにいる間ずっと中絶のことを考えている。しかし、突然、母にある変化が起こる。次の一節は、クレアが焦点人物となっている。

There was a face at the window, the face of a child, sort of floating there. It was staring into the pub. It had a kind of pleading look, [...]. It was staring right at me. [...] I was convinced, I just *knew* that I was looking at my own child. [...] [A] transformation was taking place in Claire. [...] The baby, her baby was suddenly flesh. [...] For the first time she contemplated the idea of a separate individual, of a life which she must defend with her own. It was not an abstraction, it was not a bargaining point. It was at the window now, a complete self, begging her for its existence, and it was inside her, unfolding intricately, living off the pulse of her own blood. (175)

クレアは、窓の外にいるスティーブンと目が合った瞬間に気持ちに変化し、恋人と話し合うまでもなく子供を産む決意をしている。スティーブン視点の語りと合わせて考えると、息子は過去の時間に侵入し、母は未来の息子と対面していることになる。大人のスティーブンがそこにいなければ、子供のスティーブンは生まれてこなかった可能性があり、逆にこの子供が生まれなければ大人のスティーブンは存在できず、ここでは、時間が円環的につながっている。換言すれば、大人のスティーブンと子供のスティーブンは同時にしか存在できないのである。これは、まさに過去と未来が同時にある、あるいは人間の時間の概念で表現できない瞬間である。さらに Michael Byrne は、この場面について次のように述べている。

Stephen has experienced the universal desire to return to the security of his mother's womb, only to be shaken by the knowledge of what a precarious state that truly was. The past, rather than providing a stable, predetermined course of events, is demonstrated to be as contingent and unpredictable as the future. (<http://antigonishreview.com/bi-123/123-mbyrne.html>)

「過去は、変わる事のない、予め決まってしまう成り行きの供給源

であるというよりは、未来と同じように、偶然的で予測不能であることが明らかにされている」という見解は、この作品の描く時間の不連続な展開、未来が過去を規定するような非因果的な世界をうまく表現している。

ここで少しプロットを俯瞰的に眺めてみたい。因果関係という観点から見れば、この一連の出来事は、荒唐無稽とも取れる超自然現象であり、非因果的で、かつ突然立ち現れる時間の歪みである。しかし、小説全体のプロットから見れば、ケイトの喪失に端を発する悲しみや絶望から、命の繋がりを切望するスティーブンが引き起こした連続性のある場面であり、因果律に反するものではないことがわかる。さらに、この森で意識を失ったスティーブンは、妻ジュリーの家で目を覚ますことになる。これは、別居の際にジュリーが持っていった夫婦のベッドであり、かつてケイトと一緒に寝ていたものである。そして、妻と二人でお茶を飲みながら、スティーブンは迷いながらも、ひとつの選択、つまり、そのベッドで妻と愛を交わすことを選ぶ。二人の関係はこのままうまくいくかのように思われるが、すぐにまた二人の間にケイトの不在が影を落とし、お互いそれぞれの居場所に戻ってゆくことになる。その後、しばらく会わないまま月日は流れるが、小説の結末で迎える新しい子供の誕生は、このときに授かった子供であり、この特別な日に、森での不思議な時間のなかで、スティーブン自身が救った自分の命は、新しい子どもの命にも繋がっていたと解釈できる。物理学者のセルマは、この一連の体験についてスティーブンに次のように説明している。

One offering has the world dividing every infinitesimal fraction of a second into an infinite number of possible versions, constantly branching and proliferating, with consciousness neatly picking its way through to create the illusion of a stable reality. (117)

世界は、「一説には、一秒を無限に小さく分割した瞬間ごとに、無限の数の可能な世界に拡散して、[...] 意識がそれを手際よく選択して、ひとつの安定した現実という錯覚を作り出すのよ」とセルマは語っている。これは量子

論において、多次元並行宇宙と呼ばれるもので、いわゆるパラレル・ワールドについての説明である。しかし、実際のところ、このような世界の存在は単なる仮説に過ぎず、まだ検証する方法は見つかっていないというのが大方の物理学者の一般的な見解のようである。つまり、「本来さまざまな確定値を取りうる可能性を持っている現象が、現実にある確定値を取るたびに、他の可能性を実現させた宇宙が同時にたくさん生まれている」（橋本 151-152）という仮説を立てることで、「確率で与えられているものが、なぜ特定の確定値しか実現しないのか」（橋本 152）という量子論の不備を説明しているに過ぎないのである。そこでパラレル・ワールドが仮説であることを踏まえた上で、この小説でどのように扱われているか考えてみたい。ある瞬間に忽然と姿を消したケイト、突然過去のある時間に紛れ込んだスティーブン、息子と目が合った瞬間に起こった母の決意、そしてジュリーとの愛の行為を選択した瞬間、これらのほんの一瞬の選択によって、ほかの可能性が閉ざされてきたとすれば、新しい命は、まさに奇跡的な選択の連続によってもたらされたものであると言える。パラレル・ワールドが、たとえ物理学的に証明できないものであっても、人間の頭なかでは、選ばなかった世界を想像することは可能である。現に、スティーブンは、忽然といなくなったケイトを日常的に繰り返し空想し、3歳の娘から、5歳に成長させ、その姿を現実の少女に投影している。つまり、娘のいない現実の世界ではなく、パラレル・ワールドに生きているとも言える。インタビューでマキューアンは、この買い物途中で子供が忽然といなくなるというエピソードは、「実際におきた事件に着想を得ており、誰にでも起こりうる」（Smith）ことだと語っている。セルマは私たちが日常のなかで捉えている時間の感覚について、“[...] whatever time is, the common sense, everyday version of it as linear, regular, absolute, marching from left to right, from the past through the present to the future, is either nonsense or a tiny fraction of the truth.” (117) と指摘しているが、この箇所は「時間を直線的で一定で絶対的であり、左から右へ、過去から現在を通り未来へと進んでいくものとして見ている」私たちの態度への警告であると同

時に、この小説の目指す時間の概念を際立たせている。つまり、マキューアンは、私たちが疑いなく過ごしている連続的な日常の世界に、ある日突然侵入してくる、不連続なパラレル・ワールドをこの作品で描いていると言えるのである。

Ⅱ 子供と永遠の現在

次に「子供」に焦点を当てて、時間について考えてみたい。この小説では、時間を意識させる仕掛けが随所に用意されているが、特に「子供」に託された時間の概念は、子供を「時間」と「非時間」という矛盾する要素を同時に持つ存在として描くことで、多彩に表現されている。例えば、作品中には親子、あるいは親子に類する関係を持つ人物が登場するが、特に作家スティーブンの生みの親である、編集者チャールズ・ダークは、父親のような存在であると同時に、幼児退行願望を持つ人物として描かれている。この幼児退行願望は「過去という時間」と「子供」の二つの要素への志向性を持つものであり、子供を通して時間を意識させるひとつの仕掛けと言える。2章では、スティーブンが大人を読者に想定して書いた処女作 *Lemonade* が子供向けの本として売り出され、不本意ながら児童文学作家になった経緯が語られている。その中で、編集者チャールズは、若き作家スティーブンを次のような言葉で説得している。

Dark [...] explained in a kindly manner, as though to a child, that the distinction between adult and children's fiction was indeed a fiction itself. [...] It was bound to be when the greatest of writers all possessed a child-like vision, a simplicity of approach — however complicatedly stated — that made adult genius at one with infancy. [...] [T]he greatest so-called children's books were precisely those that spoke to both children and adults, to the incipient adult within the child, to the forgotten child within the adult. (31)

スティーブんに大人の処世術を教えるチャールズは、「いわゆる児童向けの本で最も偉大なものは、まさしく、子供なかで成長し始める大人と、大人の

なかで忘れられた子供の両方に語りかける作品だ」と説き伏せる。この“the child within the adult”は、大人になっても生涯私たちの行動に影響を与える“child self”とか“inner child”と呼ばれるものである。*Lemonade*の最初の読者であるチャールズは、のちに政治家として成功しながらも、密かに幼児退行願望を抱え、大人である自己と子供である自己との葛藤に苦しむことになる。しかし、すでにこの*Lemonade*を読んだ頃から、child selfの存在が大きくなり始めており、ついには政治家を引退し、子供として生きる決断をするに至ったことが小説の終わりで明らかになる。チャールズは、なぜ*Lemonade*が子供に感動を与えるかを説明するなかで、子供の時間について次のように語っている。

For children, childhood is timeless. It's always the present. Everything is in the present tense. [...] Today is what they feel, and when they say “When I grow up...” there's always an edge of disbelief — how could they ever be other than what they are? Now you say *Lemonade* wasn't written for children, [...]. Like all good writers, you wrote it for yourself. [...]. It was your ten-year-old self you addressed. This book is not for children, it's for a child, and that child is you. *Lemonade* is a message from you to a previous self which will never cease to exist. [...] You've spoken directly to children. [...] [Y]ou've communicated with them across the abyss that separates the child from the adult and you've given them a first, ghostly intimation of their mortality. (33)

「子供にとって、子供時代は永遠に続くもので、常に現在なのだよ」という言葉から、チャールズの願望は、この「永遠に続く時間」であることがわかる。これは、時間を忘れるほど何かに夢中になる子供の性質を表現していると言えるが、同時に、「永遠に続く現在」というのは、精神分析的には狂気の状態であり、1997年の小説 *Enduring Love* に登場する精神病を患うパリーを思い起こさせる。つまり時間が常に現在ということは、「非時間的」な状態でもあり、同じ場所で反復を繰り返す狂気の現れと考えることができる。チャールズは、ある日突然、大人であることを止め、この「永遠の現在」を

生き直す決意をし、田舎へ移り住み、敷地内の森の中にツリーハウスを作り、子供として暮らすようになる。その狂気に満ちた姿は、少なからず、ステイブンの2年半に及ぶ過去に生きる生活に衝撃を与えている。この衝撃の予兆として、ステイブンは、田舎に引きこもったチャールズとセルマを訪ねていく途中で、乞食の集団に遭遇し、一人が持っているシェリーの詩集とパチュリ・オイルの香りから、何も持たず、自由に生きていた若い頃の記憶が蘇り、いつのまにか大人になり、自分の生活を守ることに必死になっている自分に愕然とする。そしてチャールズの家に着くと、セルマからチャールズは森にいたので、自分の目で彼を見て来るように言われる。敷地内の森は、ジャングルのように鬱蒼と樹木が茂り、恐れを感じながら、そこを通り抜けるステイブンは、娘ケイトの視点を獲得しなければと感じる。

It needed a child, Stephen thought, succumbing to the inevitable. Kate would not be aware of the car half a mile behind, or of the wood's perimeters and all that lay, beyond them, roads, opinions, Government. The wood, this spider rotating on its thread, [...] would be all, the moment would be everything. He needed her good influence, her lessons in celebrating the specific; how to fill the present and be filled by it to the point where identity faded to nothing. He was always partly somewhere else, never quite paying attention, never wholly serious. (105)

この思いは、若い頃の記憶が蘇り、地位や生活を守ることに必死になっている自分の変化に気付いたこと、さらにチャールズが、かつて語った「子供時代は常に現在である」という言葉に影響を受けていると言える。ステイブンは、記憶のなかのケイトは「永遠に現在に生きる子供」であり、彼女なら目の前の森に夢中になり、「この瞬間がすべてとなるだろう。自分というものが消えて無になるところまで、現在を満たし、現在によって満たされる方法を彼女に教えてもらう必要がある」と考えている。つまり娘の視点を獲得することで「永遠の現在」を体験しようと試みているのである。また“her lessons in celebrating the specific”という言葉は、細部を詳細に描くことを好

むマキューアン作品の特徴をうまく表している。子供の視点が、細部へと向かい、それが“timeless”という感覚を引き起こすとすれば、時間の概念がないとされている量子論の世界、つまりミクロの世界は、子供の世界のメタファーと考えることもできるだろう。

ここで、*The Child in Time* というタイトルについて考えてみたい。Child が表すものは、まずは忽然と消えてしまったケイトであり、スティーブンの過去という時間に生き続ける子供である。しかし、ほかにも複数の子供の存在がある。子供に戻ったチャールズ、エンディングで生まれる子供、チャールズによって生まれた作家スティーブン、さらには「量子論はセルマの子供」という表現もなされている。チャールズやスティーブンが森の中で child self を見つめ、「永遠の現在」を獲得しようとしていることから、Time を「現在」と考えれば、タイトルには「現在に生きる」というメッセージが込められていることがわかる。しかし、大人が目の前にあるものに夢中になり、「現在に生きる」子供の視点を獲得しようとする行為は、チャールズの生き方からもわかる通り、「過去に生きる」ことと切り離すことができない。チャールズの幼児退行が描かれる意味について Jack Slay は、次のように分析している。

Through Charles's regression into childhood, McEwan suggests that although it is important, even crucial, for the adult to accept the child that resides within him- or herself, it is dangerous, even suicidal, to become wholly that child-self or to surrender entirely to that desire. Acceptance and acknowledgement of the child-self can lead to a greater joy of life; submersion in that child can lead to a break down of the adult spirit. (Slay 127)

大人の自己と子供の自己の葛藤に苛まれた挙句、自殺してしまうチャールズの役割について、「マキューアンは、[...] child self を受け入れることは人生の喜びになり得るが、それに浸りきってしまうと大人の精神は衰弱してしまうことを示唆している」と Slay は述べている。これに付言するなら、チャールズの存在によって、過去は贖えないものであること、だからこそ贖おうと

繰り返す欲望が表されていると解釈することができ、この反復する行為は、のちの小説 *Enduring Love* や *Atonement* において、より一層複雑な小説構造を伴って表現されることになる。

さらにチャールズの死の翌日にスティーブンの新しい子供が生まれることは、この小説で繰り返される「命の連続」を強調するものであると同時に、過去に生きるスティーブンの生活の終わりを告げるものである。娘の不在に苦しんだ年月は、新しい命を育む時間にもなっており、時間のもうひとつの側面を表している。この小説のなかで、エンディングで明かされるまで、全く描かれることなく静かに進行しているのが、9ヶ月という時間をかけて妻が一人で育てている新しい命の物語であり、数年間におよぶ苦痛を乗り越えたスティーブンに、小説の最後にまさしく突然差し出される。いくつかの書評で指摘されている通り、その9ヶ月が9章で構成された小説に収められているのは、単なる偶然ではないと思われる。また Michael Byrne は、小説の最後に「マキューアンは時間に匹敵する人間の唯一の力として愛を差し出している」と表現している。エンディングで、スティーブンはこの時間に育まれた子供の誕生の瞬間に立会い、まだ臍帯で母とつながっている生まれたばかりの子供を見て、ほんの少しの間、自分たちが時間を超越した愛に包まれていると感じる。そして、厳しい世界を想起させる火星が窓の外に浮かんでいるのを見て、“For now, however, they were immune, it was before the beginning of time” (220) と今だけは時間から逃れていると考えるこの場面もまた、「時間と非時間」が「子供」によって表されていると言える。さらに、小説の終盤で、スティーブンが若い頃の両親と遭遇した時間の歪みについて、セルマが物理学的解釈を試みる場面があり、その会話のなかでスティーブンは、T. S. Eliot の “Burnt Norton” を引用している。

Time present and time past
 Are both perhaps present in time future,
 And time future contained in time past. (118)

この一節を読むと、すでにスティーブンが新しい命の誕生を無意識に予見していたと考えることができる。つまりこの3行が、小説の仕掛けとして機能し、プロットを要約しているのである。「現在の時も過去の時も／たぶん未来の時の中にあり、／また未来の時は過去の時に含まれる」（森山泰夫訳）というこの詩の「時間」を「子供」に置き換えてみると、エンディングで生まれてきた子供は、現在と過去を含んだ未来であり、この未来である子供は、ケイトという過去を含んで生まれたと言える。このことは、スティーブんとジュリーが小説の終わりに “[t]hey would love her [Kate] through their new child” と約束する言葉に反映されている。さらに小説では引用されていないが、この詩は次のように続いている。

If all time is eternally present
 All time is unredeemable.
 What might have been is an abstraction
 Remaining a perpetual possibility
 Only in a world of speculation.
 What might have been and what has been
 Point to one end, which is always present.
 Footfalls echo in the memory
 Down the passage which we did not take
 Towards the door we never opened
 Into the rose-garden. [...] (Eliot 3)

この箇所でも、「すべての時が永遠に今ここにあるなら／すべての時を購うことは不可能となる。／「そうになっていたかもしれない」ことは／憶測の世界でのみいつも可能な抽象にとどまる。しかし／「そうになっていたかもしれない」ことも「そうになっている」ことも／所詮は同じ一つの方向を指し示す。それは常に今ここにある。」と時間について語られている。森山氏も言うように、“redeem”は犠牲を払ったうえで取り戻すことを指しているが、ここに、政治家としての現在を犠牲にして、過去の子供時代を「取り戻す」チャールズの姿を重ねることができる。またスティーブンは2年半、小説を書くこと

もなく、娘を回想することを支えに生きていたことを考えると、記憶のなかで「過去の生き生きとした時間」を取り戻すことができれば、起こったことも、起こらなかったことも同じことであると言えるのかもしれない。この点は、まさに、記憶のなかでは、辿った道も辿らなかった道も同じであるといったこのエリオットの詩の一節に示されている考えに通じるものであり、辿らなかった道とは前章で述べたパラレル・ワールドと言い換えることもできるだろう。

このように、複数の「時間の中の子供」を通して、「子供の視点で永遠の現在を生きることの必要性」、「過去に生きることの危険」、「過去を取り戻す回想の魅力」、「命の連続」、「時間のなかにしか生きられない人間」といった時間と人間の様々な関係が描かれていることがわかる。そして、あらゆる時間の体験を通過したからこそ、スティーブンはひとつの命を取り戻すことができたと言えるのである。

結 語

The Child in Time において、マキューアンは、主人公が自己の誕生へ遡るといった未来が過去を規定するような不連続な時間を描き、日常的な時間、つまり過去・現在・未来という一方向に連続的に流れる時間の感覚を無効にすることを試みている。さらには、無数の辿らなかった世界、つまり忽然と姿を消した娘が成長を続けるパラレル・ワールドとも言うべきものが、想像力によって、成立することを示している。これらは、量子の世界の概念をモチーフとすることで、反復的に表現されていると言える。

また、この小説は、プロットが過去の回想のなかで不連続に展開するため、時間の経過がわかりにくいところがある。しかし、重要な個々の出来事は、語りの時間が急激にゆるやかになるなど、細部が生き生きと描かれ、それらを繋ぎあわせることで、おのずと因果関係が浮かび上がってくるという特徴がある。そもそも、小説というものは、読者が、因果関係が明示されていないところからプロットを読み進めながら、因果関係を再構築してゆくもので

ある。しかも、私たちは、小説の最初のページ以前から続いているはずのキャラクターの人生に、途中からしか参加できない。特にこの小説では、因果律では説明できない運動をする光の粒子のように、個々の場面が、不連続に提示されてゆく。しかし、小説全体を俯瞰的に見た場合、あるいは読者の頭のなかでそれが再構成されるときには、細部が手がかりとなり、見事に連続性のあるものが立ち上がってくるのである。

最後にもうひとつのこの小説の特徴を付け加えるなら、「子供」をモチーフにしたこの作品は、マキューアンの子供時代との類似点が非常に多く、ライフ・ライティングとしての要素がある。しかし、この作品が書かれて随分経ってから、主人公スティーブンの体験に匹敵する出来事が、マキューアン自身にも起きている。*New York Times* の記事によれば、マキューアンの両親は、結婚前に最初の子供を授かっているが、養子に出したため、マキューアンは、その兄の存在を知らずに育った。そして50年以上が経過し、両親も亡くなったあとで、兄の存在を知ることになる。まさに、忽然と消えたケイトが、次に生まれた子供の前に戻ってきたかのようなエピソードである。小説のエンディングでは、スティーブンとジュリーが、新しい子供を通してケイトを愛していくこと、ケイトが戻ってくる可能性が完全にないと決めないことを二人で約束しているが、この約束がまるでマキューアン自身に起った出来事を予兆しているかのように感じられるのである。さらには、このマキューアンの人生のエピソードが、小説の「続き」であるかのように思えてくること自体が、この小説で扱われている「連続／不連続」に変容する時間をもたらす余波であり、また「子供」に託された「時間」を意識させる仕掛けが、いかに有効に機能しているかを物語っていると言えるのではないだろうか。

本稿は、京都女子大学英文学会2007年度大会（2007年11月4日）における発表原稿に加筆、修正したものである。

Works Cited

- Byrne, Michael. "Time and the Child in Ian McEwan's *The Child in Time*." *The Antigonish Review*. <<http://antigonishreview.com/bi-123/123-mbyrne.html>.>
- Cowell, Alan, and Pamela Kent. "A Novelist's True Tale Led Him to a Long-Lost Brother." *The New York Times*. Jan 18, 2007.
- Eliot, T. S. *Four Quartets*. Ed and trans. Yasuo Moriyama. Tokyo: Taishukan, 1980.
- Haffenden, John. *Novelists In Interview*. London: Methuen, 1985.
- Maline, Shimon. *Nature Loves to Hide—Quantum Physics and the Nature of Reality*. London: Oxford UP, 2001.
- McEwan, Ian. *Atonement*. London: Vintage, 2002.
- . *Enduring Love*. London: Vintage, 1997.
- . *The Child in Time*. London: Vintage, 1992.
- Slay, Jack. *Ian McEwan*. Boston, MA: Twayne, 1996.
- Smith, Amanda. Interview. *Publishers Weekly: the American Book Trade Journal*.
- 橋元淳一郎『時間はどこで生まれるのか』東京：集英社、2006.

Reference

- Begley, Adam. Interview. "Ian McEwan—The Art of Fiction CLXXIII." *The Paris Review*. Vol.44 (2002): 31–60
- Childs, Peter. *The Fiction of Ian McEwan*. New York: Palgrave MacMillan, 2006.
- Edwards, Paul. "Time, Romanticism, Modernism and Moderation in Ian McEwan's *The Child in Time*." *English, The Journal of the English Association*. 44–178 (1995): 41–55
- 高本孝子「『時間のなかの子供』における二つの「時間」」新英米文学研究会 *New Perspective* 177号 (2003).